

# 一貫教育における諸問題

大 森 隆 實 (前目黒星美学園小学校校長)

## ・私立学校の求める一貫教育

私立学校の求める一貫教育は、学校創設時の熱い思い、教育にかける情熱を絶やさないために、各校種間の連携を密にし、それぞれが児童生徒の発達に応じた教育のあり方を共通認識することであった筈である。

それらの考えを中高の教育課程に位置付けるということになると、昨年の研究紀要に記したように、「中学校と高等学校の連携教育をはかる上に、大別して二つの姿勢が考えられる。即ち、

(1) 中学校1年から順次高校3年まで、下学から積み上げていく方式

(2) 良い高等学校の成果を得る目的で中学校の教育課程を編成し直す方式

が、それである。以下略」ということになる。

ここで述べられている良い成果とは、大学進学者に対する指導を指してはいるが、それだけではなく、当時の編集者のことばとして、「社会内存在者としての人間形成に欠かすことのできない基本的能力を内面的に深く定着させようと努力した跡は尊重したい。」と記されていることから、時を越えて、私立学校としての建学の精神を大切にしている姿がみられるのである。

中学受験が一段落した今は、新聞やその他の情報を見る限り、ますます、それは加熱の一途をたどっているといってもよい。この3月に小学校を卒業する児童は首都圏で約30万600人といわれている。このうち国・私立中学を受験したのが51,000人、公立中高一貫校のみの受験者は6,700人。実に、5万7千700人が中学を受験したとみられる。受験率でいえば、今春小学校を卒業する児童の約19パーセントに達するのである。

義務教育をはさんでの数値である。いかに中高一貫教育について国民の関心が高いかを裏付けている。このことから、国民の一貫教育に対する認識は先に述べた大学進学の実績を念頭においたものであるといえよう。大学受験に対する優位さを意識しての一貫教育は、果たして本来の一貫教育の意味からはずれてしまっているのではないか。大学受験の実績において、私学に追いつけ、追い越せの思いから、公立学校も私学のノウハウを取り入れて来ているのは止むを得ないことではあるが、ここで私たち私立学校にかかわるものは、もう一度教育という観点から一貫教育の姿を考えていくことが必要ではないだろうか。

## ．一貫教育に対する認識の変容

4年前にわたしが、この研究を手掛けたときとは、世間の一貫教育に対する考え方が、変容してきているように思える。最初は私学の志していた校種を越えた学校設立時の教育にかける思いが、どう連携するかをテーマに研究を進めてきた。ところが、時が進むにつれて、教育問題が社会の関心事として、大きくクローズアップされてきたのである。犯罪の低年齢化やいじめ、不登校、等々、数えあげればきりが無い。

昨年、研究の中で取り上げた、小中9ヶ年を3つのステージに分けて、教育をしようとする試みは、教育特区によって全国に広がりを見せたばかりである。子どもの成長と合わせて、義務教育9ヶ年を考えると、小と中のギャップをできるだけ少なくしてスムーズに移行しようとしたものである。その裏には生活指導上の中一問題が潜んでいる。即ち、中学一年生の二学期になると、不登校者が増えたり、学級崩壊が進むという問題である。中学校に入学と同時に学級担任制から専科教諭による全教科教科担任制になる現状についていけない生徒の学校嫌いや、戸惑いから起こる諸問題を早急に解決しなければならない、ということから義務教育を3つのステージに分けて教育しようとするものである。

## ．アンケート調査の結果から

今回は九州地区に在る14の私立小学校にアンケート調査を実施し、地方における私立小学校の実態を把握するとともに、一貫教育についての認識を深めるために、その課題を探った。

14校の内11校から回答を得ることができた。11校の内訳は共学校9、女子校2、男子校1である。そのうち3校は中学校を併設していない。そのことから、純粹に学校設立時の精神が、人を育てる、即ち教育に軸足を置き、それに賛同した人たちの子弟が入学しているということが解る。しかしながら公立と対等に経営していくとなると、さまざまな困難が生じているのも事実である。九州という地域性が私学経営にどう影響しているか、少しでも解明できればという思いから考察していく。

アンケートの結果からみると、回答のあった11校中の6校までが、継続する高等学校を持っていない、ということが分かる。公立志向が東京に比べて、著しく強いからではないだろうか。その地域で生きていくには、ネームバリューのある県立高校に入学することが不可欠である。もち論、大学進学を考えてもそれが目的達成のために大事な条件といえるだろう。逆に考えてみれば、一番私立学校らしい私立学校が多い地域とも言えるだろう。初等教育における人間づくりを大切に考えているからである。

私立学校の独自性を保ちつつ、地域の中で高い評価を受けている学校も少なくない。わたしたち私学志向の強い首都圏にある学校も、決して驕ることなく、私学としての独自性を大切にしながら、前進していかなければならないと心を新たにすところである。

主なアンケートの調査結果を次頁以降の表に示す。

調査用紙

平成18年12月15日

小中の連携に関する調査(平成18年度対応)

財団法人日本私学教育研究所

貴学校のプロフィール

小学校名	小学校	学校法人名	
男女共学校別	男子校 女子校 共学校	併設する中学校(進学先) 進学先の系属中学校が複数の場合は、そのすべてに を付けてください。	
児童数	男子 名 女子 名	1. 男子中学校 2. 女子中学校 3. 共学中学校 4. 併設中学校はありません	
1学年クラス数	クラス		

アンケートの該当する問にお答えください。 選択肢は をつけてください。(いくつでも可)

問1. 昨年度卒業した児童数及び進路についてお伺いします。

- A. 卒業児童数 男子( 名) 女子( 名)
- B. 卒業後の進学先
- ア. 併設の中学校 男子( 名) 女子( 名)
- イ. 公立の中学校 男子( 名) 女子( 名)
- ウ. 私立の中学校 男子( 名) 女子( 名)
- エ. 国立の中学校 男子( 名) 女子( 名)

問2. 小学校、中学校間で教育課程や進学について話し合いの場がありますか。

1. 小中全教員による話し合い(研修も含む)の場がある。
2. 校長、教頭は話し合いの場を持っている。
3. 小学校と中学校にそれぞれ任されているので、殆ど話し合う場はない。
4. 理事会レベルの話し合いにとどまっている。
5. その他( )

問3. 中学校への進学の実情について

1. 一貫教育をうたっているので、全員進学できる。
2. 小学校の推薦で中学校の進学は決まる。
3. 推薦はするが、テスト後に多少、可否の違いが生ずる。
4. 進学に関しては、同一法人の中学であろうが、他校であろうが、まったく自由に選択している。
5. その他( )

問4. 共学の小学校だけがご回答ください。

1. 中学校も共学なので全員希望すれば進学できる。
2. 原則として、全員内部中学に進学できるが、能力によって進学できない場合もある。
3. 一貫教育なので外部受験は認めていない。
4. 中学は女子校なので、男子は外部受験を自由にしている。女子は外部受験はできない。
5. 併設の中学校が、共学・男子・女子とあるので、児童の希望で進学先が決められる。
6. その他( )

問5. 中学校の入学試験について

1. 一般の入試と同じように受験する。
2. 内部生として、中学の募集のわくとは別にして別の日に行く。
3. 一般入試と同じように行うが、可否の判定は分けて行う。(推薦によって決定される)
4. 小学校からの推薦ですべて決定するので、入学試験としては行わない。
5. その他( )

問6. 中学校から小学校に対する日頃の評価について

1. 入試のときの成績があまり良くないので、よく言われない。
2. 内部生は何かと評判が良いようだ。
3. 外部から入学してくる生徒と内部から進学する者とが、うまくなじめてないとよく聞く。
4. 卒業する頃になると評価がアップするようだ。
5. その他( )

問7. 小学校、中学校のギャップについてどう感じますか。

1. 子どもたちが学担制から専科制ということで、戸惑いを感じる。
2. 児童・生徒の交流の場が欲しい。
3. 中学校の方でも小学校の教育についてもう少し理解して欲しい。
4. その他( )

問8. 小学校、中学校の連携について、貴校の方針、また、お考えをお聞かせください。

問9. 貴校の教育における地域性について、お考えをお聞かせください。

調査結果

校名	男女別	児童数 男	児童数 女	1学年 クラス 数	併設 する 中学校	問1- A 男	問1- A 女	問1- B 男	問1- B 女	問1- B 男	問1- B 女	問1- B 男	問1- B 女	問2	問3	問4	問5	問6	問7		
A																					
B	女子校	0	682	3	2	0	123	0	105	0	8	0	8	0	2	2	2	4	4	3	
C	共学校	130	94	4	25	25	17	0	0	2	1	21	16	2	0						
D	共学校	340	384	3	3	54	63	49	61	4	1	1	1	0	0	1・2	2	2・3	4	2・4	4
E	共学校	89	100	2	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2		1				3
F	共学校	98	166	2	3	12	14	6	8	2	2	4	4	0	0	4・5	3・4	2	1	3	2・3
G	共学校	70	78	1	3	11	16	9	8	2	5	0	3	0	0	1・2	1・3	1	1	1・2	1・3
H	共学校	172	177	2	4	27	25	0	0	13	11	12	11	2	3		4				
I	女子校	0	129	1	2	0	35	0	26	0	6	0	2	0	1	1	1		3	2	2
J	男子校	141	0	1	1	35	0	28	0	2	0	5	0	0	0	2	2		3	5	4
K																					
L	共学校	44	41	1		11	7	0	0	11	6	0	1	0	0	5	5	6	5	5	4
M	共学校	300	286	3	3	40	60	16	32	3	7	19	20	1	1	1	1	1	2	2	4
N																					

校名	問8	問9
A		
B	本年度より理事会において(幼)小中高一貫教育を見直し、特色ある学園の改革をめざして経営の視点から強力に取り組んでいく。課題の洗い出しを校種別におこない整理した。課題解決の3年後の数値目標を打ち出した。最初に英語と宗教の一貫カリキュラムを確立させる。先進校の見学、ネイティブ教員の資質向上、会話力アップ、教育のバックボーンである宗教、建学の精神の共通理解、研修	特に私立高校は公立高校の「すべり止め」の考えが今なお強い。昔の藩校である高校が各地区にあり今なお健全である。少子化の傾向から私立中高が小学校建設に踏み切っていくと予想される。広報活動の一貫性と促進に力点をおく
C		福岡市内の南部に位置し、交通の便は十分とはいえない。多方面からの通学でスクールバス5台が必要。近くに公立小学校があるが交流はない。学院内の幼稚園が附属ではない。以上の事から地域から学ぶ内容が乏しいことは課題である
D	建学の精神と教育方針の共有化をはかる/小中高(事務・施設管理を含む)の全教職員を対象とする研修会を行う(外部の教育コンサルタントに依頼)/小の英語教育を全面的に変革したために(7年前)小中の英語教育のつながりが困難になり相互にギクシャクになった期間が続いた。そこで小中の英語教師が週一回は必ず相互の授業を見学することを義務付け、学期ごとにミーティングをするようにしている。中の英語教師が少しずつ理解できるようになり改善をはかろうとする段階にきている	地域では創立100年(3年後)の私学として高い評価をいただいている。明小教育の特徴と方針を理解し、それを汲んで入学を希望して下さるので私たちの教育については、全面的に協力して下さる
E	小中高一貫教育を目指して設立された学校なので連携を深めて教育効果を高めるように考えています	北九州の私立小学校は2校しかありません。本小学校は設立4年目で地域社会によくよく認識されてきました。年1回ですが地域住民と児童・保護者による町美化清掃・トンネルの歩道側に落書き防止の壁画を描いたりしています
F	幼少中高が併設されているということで順調に行けばエスカレーターだが、小と中の交流が少なく、外部受験する児童も多いため、もっと交流連携を深め、合同行事などを行っていくことが必要だと感じる	市内だけでなく市外からも通学してくる児童もあり、行事なども地域と共にというものは少ないため、地域に根ざした学校という実感は持てない
G	学校行事のほとんどは小中合同で行い、児童生徒の交流を図っている。英語の授業では中学校の日本人英語教師が小学校の日本人英語教師でT.Tの授業形態をとっている(6年生のみで行っている。これは児童が中学に進学した際のギャップをできるだけ取り除くため)小中職員が一緒になって教科研修を行っている(それぞれの教育について理解を深めるため)	カトリック信仰のさかんな長崎であるから、信者、未信者の児童関係なく良きキリスト者を育てていくことが使命であると考えている
H	法人が異なるが、同じカトリック学校として、また兄弟校として教育方針を同じくするので、できるだけ長崎南山中学校と純心中学校に進学をすすめている	長崎の一小教区の教会と一体となった学校で、主に信者の子女を教育するために設立されたが、現在は3割を切るようになった。しかし、設立の基本理念は変えずにカトリック学校の使命を果たさねばと考えている
I	学習効果、生活指導効果を追求する上で、7~15歳の9年間の一貫教育はメリットが大きいと思われる。小5、6年~中1にかけての思春期を同じ教育環境のもと、児童・教師間の理解、保護者・教師間の信頼という支えをステップに、子供達や家庭が安心して過ごすことができる。また、学習面も、カリキュラムを編成し、無理なく、無駄なく小中をつなぐ研究の余地がある	最近少しずつ変化して来ている感があるが、依然として公立志向、県立志向は強い。私立を選択するのは学費のこともあり、ある程度の生活ステータスを得た家庭がするものだ、との意識がある。一方、教育の質、濃さや、心の教育重視という点で少しずつ私立に目を向ける所も増加している。本校は小学校から女子のみの教育という点で、長崎県唯一であるが、小学校の間は共学を望む家庭が案外多い。他県での私立女子校などの情報はあまり知られていない。本校の特色的なものを挙げるとすれば、家庭的な雰囲気と保護者との濃やかな連携について、ある程度評価を得ている。また国際的センスを他であまり味わい育成する場がない分、本校の小1~中3までの英語教育、国際性の取り入れの先端性について、更に伸ばしたい
J	数年前まで小中教員室も同じであったので連携については、ほとんど問題はなかった。今も職員会議や各種部会などは合同で行っている	これまでは、広域通学のため地域との結びつきは弱かったが、これからは自治会の行事や近隣の公立小学校とも交流を図るよう心がけている
K		
L	個人の希望で英語に関しては小中の連携をはかれないものかと現在検討中である	*本市に私立は一校なので、日常の教育活動の場ではほとんど交流がない*地域での行事や研究団体主催の発表会、コンテスト等はオプトンに参加している*職員の大抵が地域に居住しているので、そのあたりの情報は少しは入手出来る程度*保護者の協力が素晴らしいので、いろんな場面で学校は助けられている*いい意味で一目おかれているので、それに対する努力はたえずおこたなく実践している
M	同じ建学の精神、教育理念・目標を持つ一貫校として、学習指導、生活指導でできる限り連携して行っていく。(例)教科の連携:理科部会による小学~中学校のカリキュラム編成協同教科研究/年2回の学園研修(4月、8月)において幼稚園、小学校、中学校の教職員がカトリック教育及び一貫教育についての研修及び分科会での情報交換を行っている	地域の伝統・文化を積極的に教科学習や行事に取り入れ地域の伝統・文化について理解し、生活に活かすとともに尊ぶ心を育てている
N		